

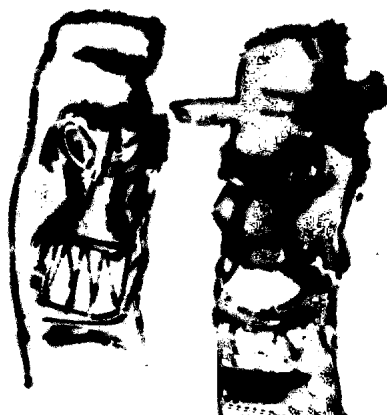
セドリと魔法のツレシ

ウォン・ド・ホング作 南宮輝訳 李耕雨絵



魔法のツレシ

ウォン・ド・ホング作 南宮輝訳 李耕雨絵



新日本出版社

929・13 ウォン，ド・ホング

セドリと魔法のツルハシ 南宮 輝訳

新日本出版社 1968

148p 21cm (新日本こどもの文学3)

原作名 보 물 의 분 금

作者名 원 도 흥



検印省略・

新日本こどもの文学3 セドリと魔法のツルハシ

1968年12月20日 第1刷発行©

定価 560円

原作者 ウォン・ド・ホング

訳者 南宮 輝

画家 李 耕雨

発行者 松宮龍起

発行所 株式会社 新日本出版社

郵便番号 102 番 東京都千代田区富士見 2-13-14

電話(262)4732 振替東京13681番

印刷・製本 鎌倉印刷株式会社

(落丁・乱丁がありましたらお取替えいたします。)

まえがき

おい、みんな、ふかい山おくへ
行ったことあるかい？

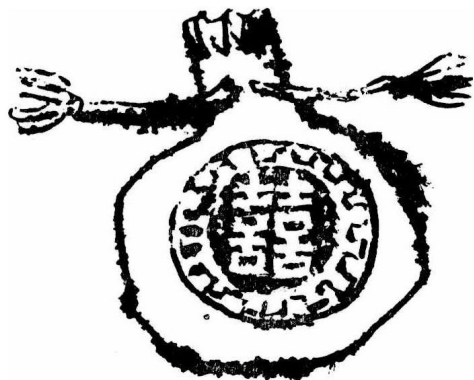
マンムル山さんの、くらーい森のおくのぜっぺき、
そこが地底ちていの国の入り口なんだよ。

セドリはね、その中にはいって行って、
たからのおひめさまに、いいものもらったんだ。

シーツ！ それは、ぜったいヒミツ。

ろうやに入れられたって

しゃべっちゃいけないんだ。



(ジュモニ)

もくじ

まえがき	1
1 マンムル山 さん のセドリ	4
2 水の国のおばさん	20
3 地底 ちてい の国	31
4 ぬすまれたツルハシ	43
5 とらわれたセドリ	56
6 魔王子 まおうじ の変身 へんしん のじゅつ	68
7 銅 どう の村のおじさんたち	83
8 「たからのおひめさま！」	93
9 ひみつの手紙	119
10 あらしの海で	129
あとがき	149

作者紹介

訳者 南宮輝 一九三二年生まれ。在日朝鮮文学芸術家同盟同盟員。

画家 李耕雨 一九四一年生まれ。武蔵野美術学校第二本科卒業。在日朝鮮文学芸術家同盟美術部部員。



1 マンムル山^{さん}のセドリ

マンムル山は、とても大きく、うつくしい山でした。みねみねは天高くそびえ、雲はたなびき、ふかい谷そこをながれる水は、すみきっていました。

春になると、山は、色とりどりの花でかざられ、夏は、みどりの木ぎにおおわれます。秋には、目もさめるような赤やきいろのもみじにつつまれ、冬は冬で、まわたのように白い雪に、つつまれてしまします。

このマンムル山のふもとにある、ちっぼけな小屋^{こや}に、セドリという少年が、住^すんでいました。

セドリは、早くからおかあさんに死^しにわかれ、年とったおとうさんとふたりで、カジャをしていました。心のやさしい少年で、とても、はたらきものでした。小さいころから、おとうさんのカジャしごとを手つだつたので、うでや足などは、子どもとは思えないくらいにたくましさでした。

セドリとおとうさんは、いつも、お日さまがのぼるまえにおきて、しごとにかかりました。そして、夜空に星^{ほし}がきらめくまで、まっかにやけた鉄^{てつ}をうって、スキやフミグワ、手グワやカマ、オノやカタナなどをこしらえました。

春さき早くから、秋がふかまるまでは、
こうして、おひやくしょうさんたちが
つかう、いろいろなどうぐを
こしらえていました。

マンムル山^{さん}に、雪がふり
はじめると、セドリ

とおとうさんは、
冬じたくをとと
のえ、ツルハシ
やタガネ、オノ、
ノコギリなどを
かついで、マン
ムル山へのぼり
ます。

マンムル山の
おくには、つぎ
の年につかう鉄^{てつ}



をほったり、炭^{すみ}をやいたりするため、セドリたちの山小屋^{やまこや}がありました。炭をやいたり、鉄^{てつ}をほるだけでなく、セドリたちは、ほう石^{せき}なども、ときどきほりました。なんとかして、びんぼうぐらしから、ぬけだしたかったのです。

ほう石をほりあてれば、小屋^{こや}も大きくりっぱになおせるし、しごと場^ばも広げられる、お米のごはんもたべられる、と思ったからです。ところが、いくらほたらいても、くらしは、ちつともよくなりません。

そればかりか、その年は、かえってたいへんなことになってしまいました。王さまが、山でとれた金、銀^{ぎん}、ほう石をのこらずさしだせという、おふれを出したのです。王さまは、それでもって、都^{みやこ}に大きなきゅうでんをたてるつもりでした。

セドリたちは、しかたなく、いつもの年より早めに、山小屋へ出かけました。おおいそぎでほう石をほって、王さまにさしだし、そのあとでいつものように、鉄や炭^{ようい}を用意しようと思ったのです。

住^すむひとのいなかった山小屋は、かれ葉^はやほこりで、すっかりよごれきっていました。そこで、セドリは、きれいに小屋の中をそうじして、カマドに火をつけました。やがて、えんとつからは、はい色のけむりが、もくもくとふきあげ、カマからは、ゆげがゆらゆらとたちのぼりました。

長いあいだねむっていた山小屋^{やまこや}は、生きかえり、あつたかで、住^すみごこちよいものになりました。お日さまも、このちつぽけな山小屋を、やさしくつつんでくれるようでした。小鳥たちも、にぎやかに、小屋のまわりでうたいだしました。

小屋の手いれがすむと、セドリとおとうさんは、ツルハシと、大ヅチと、タガネをかついで、玉のみの谷間へ、はいりこみました。ふたりは、いつもそこでほう石^{せき}をほるのです。けれども、金や銀^{ぎん}、ほう石が、そんなにたやすくほれるわけはありません。一月^{ひとつき}かかって、小さなふくろいっぱいほう石を、やつとほりだすと、ふたりは、おおいそぎで山をおりました。

ところが、都^{みやこ}からやつて来た役人^{やくにん}は、セドリたちがほねおってほりあつめたほう石を見るなり、どなりつけました。

「こんなやすもの、いくらほってきたってだめだ！」

「では、お役人さま、どんなものをほってくればいいんです……」

おとうさんが、おどおどたずねました。

「ヒスイをほってくるんだ、ヒスイを……」

しかたなしに、セドリとおとうさんは、また山へもどり、こんどは、ヒスイをほりはじめました。それから、一月半^{ひとつきはん}もかかって、やつと二ふくろ^{ふた}のヒスイ



をほりだし、役人^{やくにん}のところへ、はこびました。
するとどうでしょう。役人は、こんども顔^{かほ}をしかめ、ろくになかみもしらべ
ないで、こういうのです。

「なんだ、これがヒスイだって！」

「そうですよ、お役人さま。あなたさ
まにいわれたとおり、わたしどもはヒス
イをほってきたんですよ」

おとうさんは、顔色^{かほいろ}をかえました。役
人は、こわい顔で、ギョロツと、おとう
さんをにらみつけていました。

「こんなヒスイがあるか、ニセものな
ど、いくらほってきたってだめだ。つべ
こべいわずに、さつさとかえれ。赤い、
ほんもののヒスイをほってくるんだ！」
そばできいていたセドリは、あきれて
しまいました。ヒスイは、青いものとき
まっているからです。セドリは、がまん

しきれなくなっていました。

「お役人さま、それは、ベニほう石のことじゃないんですか？ 赤いヒスイなんて、きいたこともありませんよ」

役人は、ことばにつまり、顔をまっかにしておこりました。

「赤だろうと青だろうと、もつとほってくるんだ！ それともなにか？ 王さまのめいれいが、きけないっていうのか？ さっさと行くんだ！ ガキのくせしてなまいきな……」

セドリもおとうさんも、からになったふくろをかついで、役所を出てくるしかなかった。

役所の門を出ると、おとうさんは、長いためいきをつきました。そして、雪につつまれたマンムル山を見あげながら、つぶやきました。

「こんなことじゃ、この冬は鉄も炭も、どうなってしまうやら」

その声は、しんぱいのあまり、ふるえていました。山へもどる道みち、セドリは、おとうさんのしんぱいをなくすには、どうしたらいいか考えました。

山へもどったふたりは、また、ほう石ほりにかかりました。でも、ベニほう石は、ヒスイよりも見つけにくく、いくらふかくほっても、なかなか出てきません。そればかりか、ある日のこと、あまりふかくあなをほりすぎたので、岩

がくずれ、おとうさんは、その下じきになってしまいました。

セドリは、あわてて岩や土をほりかえし、たすけだしましたが、おとうさんは、死んだようにぐったりして、気をうしなっていました。セドリは、こわく
なつて、いそいでおとうさんをおぶうと、いっきに村へかけおりました。

村のおとしよりや、おじさんたちが、ハリをうったり、おきゆうをすえたり
して、どうやら、おとうさんのいきは、ふきかえしました。でも、とうぶんの
あいだ、からだをうごかすことは、できなくなっていました。

セドリは、おとうさんが、このままうごけなくなるのではないか、としんぱ
いで夜もねむらず

かんびよ

うしま

した。

このこと

をどこでき

いたのか、ある

日、役人やくにんがやって来

て、セドリを山へおい



えしてしまいました。セドリは、おとうさんのケガが、なおるまでゆるしてくださいと、何度なんどもたのみましたが、役人やくにんはしうちしません。

しかたなく、セドリは山へもどり、あなをほりはじめましたが、おとうさんのことが気になって、しごとが手につきません。そこで、セドリは夜になると、はるばる山道を村までかけもどり、おとうさんのかんびょうをしてから、朝早く山へのぼったりしました。夜もろくにねむらないセドリは、すっかりくたびれてしまいましたが、おとうさんのからだは、すこしずつ、よくなっているのが、せめてものよろこびでした。

——そうだ！ いそいでほう石せきをほってしまい、それから来年らいねんのしたくにとりかかろう——

セドリはそう考え、むちゅうで、はたらきだしました。あんまりはたらきすぎたので、ある日のことセドリは、ツルハシを手にしたまま、その場ばにたおれるように、ねむりこんでしまいました。

どれくらいたったかわかりません。だれかに、ゆりおこされたような気がしました。はつとして、セドリは目をさました。するとどうでしょう。目もさめるような、うつくしいおひめさまが、目の前に立っているではありませんか。おひめさまのまわりは、まひるのように明るくかがやいていました。

おひめさまは、キラキラ光るきものをきて、七色^{なないろ}にかがやくほう石^{せき}のかんむりを、頭^{あたま}にのせていました。

ふしぎなおひめさまは、お月さまのように明るい顔^{かお}をにっこりさせ、

「わたしは、地の底^{そこ}のたからものを、あずかっているせんによです。さ、元気をだして、わたしたちのほう石をもつとほってください。ほう石はいつも、じぶんが世^よの中にやくだつことを、ねがっているのですよ。このねがいをおこなえようといっしょうけんめいのあなたに、おれいがいいたくてまいりました。このツルハシで、左のかべをちよつとほってごらんさい。いまそこでベニほう石が、光にあたるのをまちかねていますわ」

そういつて、先のとがつた長いツルハシを、セドリにわたしたかと思うと、おひめさまのすがたは、すうつときえてしまいました。わたされたツルハシには、えがついていませんでした。

セドリは、おひめさまにいわれたとおり、左のかべをほってみました。ひとりすると、ツルハシの先からいはずまがとび、かみなりがとどろいて、岩^{いわ}あなのかべはさけてくずれおち、そこから、ベニほう石がまぶしい光をはなつてこぼれ出てきました。セドリは、あつというまに、ベニほう石を、二ふくろもほることができました。

セドリは、さつそくそれを荷車にぐるまにつんで、役人やくにんのところへはこびました。

役人は、すばらしいベニほう石せきに、心の中ではびっくりしましたが、ほう石をハカリにかけるなり、もんくをいいました。

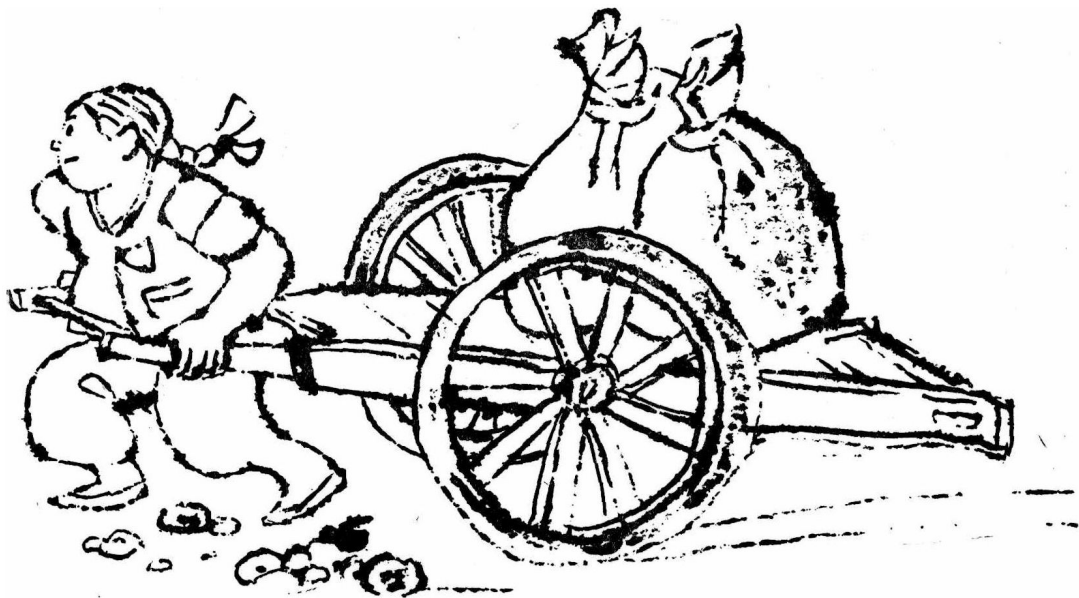
「なんだ、これっぽっちか。これじゃ、はなしにならん。この十ばいけなけりや、ゆるすわけにはいかん」

セドリは、思わずかーっとなつて、目がくらりました。でも、ここでケンカをしては、そんだと思い、

「お役人さま、では、あとどれくらいほつてくればいいんです？」

と、いかりにふるえながら、ひくい声できくと、役人は、セドリがもつてきたほう石をしまいこみながら、

「この十ばいだ、十ばい！」



と、さめんどくさそうにどなりました。

セドリは心の中で、あのふしぎなツルハシさえあれば、それくらいは、二、三日ではれるだろうと思い、

「お役人さま、十ばいというと、このふくろで二十あればいいんだね？」

と、もういっぺん、ねんをおしてから家へかえりました。

おとうさんは、ずいぶん元気になっていましたが、まだ、こしのいたみがとれなくて、おきあがることはできません。ほおのこけたセドリを見て、おとうさんは、とてもすまなく思いました。

「わしのからださえ、こんなでなかつたらなあ。おまえには、くろうばかりかけて……」

「なにをいうんだ、とうさん。そんなことより、一日も早く元気になっておくれよ……」

と、セドリはこたえながら、早くしごとをかたづけ、おとうさんのかんぴようをしなれば、と思いました。そこで、村の牛車ぎゅうしやをかりて、山小屋やまこやへもどっていききました。

セドリは、休むまもなく、玉のみねのほらあなへはいりこみ、いなずまをおこす、ふしぎなツルハシをふるって、ずんずんおくへとほりすすみました。し